校友時報

昭和47年7月20日
編集人兼発行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

第18回全県総体

体操優勝す

第18回秋田県高校総合体育大会は去る6月16日より4日間、秋田市を中心に各会場で開催された。
開会式は、直前より降り出した雨の中、4年ぶりに八橋陸上競技場で開かれた。
我が校からはバレー・バスケット・体操・卓球・剣道・柔道・庭球・陸上競技の8種目に参加した。
全般的に昨年よりも好調で、体操部は4年ぶり13度目の優勝を成し遂げ、また、他のクラブもよく健闘した。

秋田市立に完敗

野球

去る、五月二十四、二十五の両日、全県招待野球が能代市営グランドで行なわれた。

本校は一回戦大曲工と対戦し、投手力も安定し、守備も大きなミスがなく、また、打撃も活発で、終始相手を圧倒していた。

二回戦は宿敵、秋田市立高と対戦したが、一回表に、相手の守備の乱れで三点先取したものの、こちらの投手の乱れから逆転され、せっかく出塁しても、後半相手の投手に押えられ、後続の好打が相手の美技にはばまれるといった具合に、つきにも見放されて、結局10対5の大差で敗れ、決戦進出がならなかった。夏の大会での奮起をのぞむ。

秋田工に快勝

三年ぶり

個人も三位まで独占

第十八回全県高校総合体育大会は六月十六日より四日間にわたり秋田市を中心として行なわれた。

十六日は、おりからの豪雨をついて、四年ぶりに八橋陸上競技場で、開会式が開かれた。また、その日は雨のため、テニスの団体戦が一日順延された。屋内ではバスケットや卓球、柔道が予定通り行なわれた。

大会第二日の十七日は好天に恵まれ、テニス団体、剣道、バレー、柔道などに熱戦が操り広げられた。

三日目の 十八日にはテニス個人、柔道個人のほか、勝ち残ってきたバレー、剣道団体が行なわれたが、結局最終日の二十日まで残ったのはテニス個人一組だけだった。なお体操や陸上競技は日程の関係上、開会式を待たずにすべての試合を消化していた。

各クラブの活躍を顧ると――。

体操は、十二、十三、十四の三日、県立体育館で行なわれ、四年ぶり十三度目の優勝を成し遂げた。また、それと同時に秋田工に雪辱した。これには、どの種目においてもほとんど大きなミスがなかったことが最大の勝因である。また、特に心強く感じたのは二日目の自由演技を観戦していて、規定で秋田工に8点リードしていたことから各選手とも演技に落着きがみられたことである。

個人でも一位から三位まで独占し、種目別においてもすばらしい得点で、体操能代ここにありと言うにふさわしい 試合経過であった。これから開かれるインターハイ、国体などでの活躍に大いに期待したい。

バレーは経大附属高体育館で行なわれた。一回戦、二回戦はエースの北林のスパイクが思うように決まり、快勝した。しかし、秋田工戦は、一セットは相手の好守備によって完敗。二セットは相手のアタックミスなどから14―8まで追い込みながらネットタッチなどのちょっとしたミスで逆転されてしまった。しかし、ベスト8に残ったのだから賞賛できよう。

卓球は 十五日から三日間、敬愛高で行なわれた。三回戦まで進んだものの、大曲工と熱戦の末惜しくも負けた。また、この試合は気力で負けたといえるほど精神的な影響が大きく、そのため、その後行なわれた個人戦では奮わなかった。

柔道は 秋田工業体育館で行なわれ、団体は決勝トーナメントに進出できなかった。予選リーグでは、大曲東には難なく勝てたものの、経大附属高（団体優勝者）には、よく闘ったが、相手の力に押され敗退した。

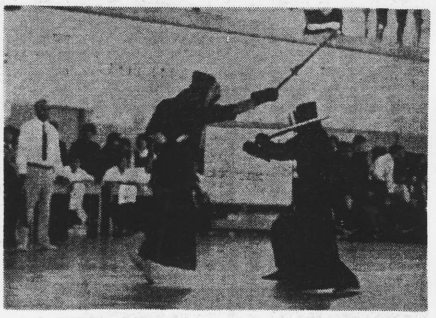
個人戦では、重量級に出場した川村君（三A）が力と技のうまい組合せで相手を倒し、ベスト8まで進出したのが目立っている。

庭球は十七日から三日間、八橋コートで行なわれた。団体の二回戦での能代工業とは、これまで市内で何度も練習試合を行ない、どちらも相手を知りすぎていたため、思うように試合が運ばず、惜敗した。個人戦では、高橋・泉組がその絶妙なプレーでベスト8まで進出、東北大会の出場権を獲得し、今後に期待を持たせた。

バスケットは 十六日、秋田高校体育館で行なわれ、一回戦で優勝候補の一つに上げられていた湯沢高校と対戦し、奮戦空しく敗れた。また、シュートが決まらなかったり、パスが続かないなど基本的なプレーにミスが多かった。

剣道 は十七、十八の二日秋田南高体育館で行なわれた。団体戦では決勝トーナメントに進出し、一回戦の経大附属は問題にしなかったが二回戦の秋田南には善戦空しく敗れさったがベスト8に進出したことは喜ぶべきことだろう。

陸上競技は六月十二日より三日間八橋グランドで行なわれた。四百メートルリレーでは準決勝まで進出した。また、各種目における個人の記録は向上しており、来年は大いに期待できそうである。



剣道個人、金子メンで一本をとる（秋田南で）

東北大会をも制覇

体操部

去る六月二十九日より三日間、秋田県立体育館において、第一回東北高校体操選抜大会が開催された。

この大会は、インターハイ、国体などの全国的な大会に備え、実力を養っておこうという理由で今年から開かれたものである。

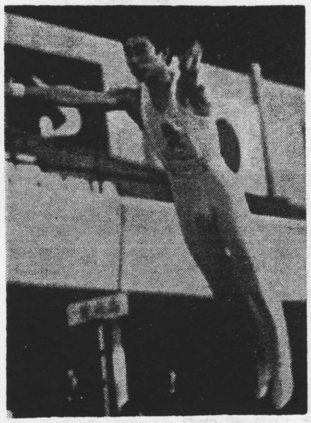
秋田県からは男子は、我が校と秋田工が出場し、秋田工は五位でおわったが、わが校は、今年の東北の覇者といわれていた宮城の仙台育英高など各県の強豪を押えて優勝をした。

監督の話によると、開始前から優勝できる可能性があると考えていたし、また、部員たちも優勝するつもりで努力をしていた。

しかし、優勝はしたものの、まだまだ、練習やその他に甘さがあり、次のインターハイまではいままで以上の練習をしていくつもりであるとのことだった。

結果は次のとおり。

◎団体総合　優勝　313・40
◎個人総合
優勝　北林　106・25
二位　小林　105・75



体操個人優勝の北林君の跳馬

総評　目立ったねばりのなさ

今年の総体を振り返ってみると体操が優勝し、またバレーや剣道などの奮戦が目立ち、さらに、例年になく個人戦での活躍が大きかったことが特色である。

全体的にみると、ほとんどのクラブが昨年に比べ実力が向上してきている。

しかし、反省すべき点もないわけではない。第一にあげられることは、ほとんどのクラブでねばりが欠けていることである。バレーにしろ、また他の競技にしろ、あと少しというところで敗れたケースが多かった。選手も応援団もほんとうに残念であったと感じた試合が多かった。それだけに、技術に関しては遜色がないのに最後の最後までねばる、という気力の差で負けたといえる。このことから次の機会には、どこまでも相手にくらいついていくというねばりを持つように、精神面の 強靱（じん）さを養うことにも努めてほしいものである。（E）

結果は次の通り。

◎体操
団体　総合優勝　311・40
（十三度目の優勝）
個人
総合優勝　北林　104・55
総合二位　小林　101・45
総合三位　畠山　100・50
種目別　床運動
一位　北林　17・80
鞍馬　一位　北林　17・90
平行棒　一位　北林　17・75
◎卓球　男子団体
二回戦　能高4―2湯沢高
三回戦　能高3―4大曲工
男子シングルス
二回戦　佐藤0―2秋田商
田村0―2秋田商
◎バスケット
一回戦　能高55―84湯沢高
◎柔道
団体　予戦リーグ
能高5―0大曲東
能高0―4経大付
個人　重量級
三回戦　川村×―○秋田工
◎庭球　男子団体
二回戦　能高1―2能代工
男子個人
二回戦
河田・益子0―4鳳鳴高
安井・大川2―4本荘高
高橋・泉4―3秋田工
三回戦
高橋・泉4―1秋田南
四回戦（準々決勝）
高橋・泉0―4鷹巣農
◎剣道　男子団体
決勝トーナメント
二回戦　能高2―3秋田南
男子個人　二回戦
金沢0―1（延長）本荘高
金子0―1（延長）湯沢高

修学旅行の日程決まる

今年は四国へ

今年は、例年の修学旅行のコースが一部変更になった。去年のコースは奈良までの六泊七日であった。行き帰りは、表裏日本を通ったのだが、今年は四国まで足を延ばして、太平洋側だけを通る六泊七日に決まった。コース変更の理由として、東京へ行く機会がわりと多いので、わりに行く機会の少ない所を、という観点から関西を中心に回り、四国まで行くことに決定した。出発予定日が去年より一ケ月ほど早くなったのは、学校側の申し入れが、他校との兼ね合いから通らなかったのが主な理由である。なお、旅費が七千円割増しとなった理由は、ユース延長と物価の上昇からきたものである。

十月六日午前八時四十五分発、特急稲穂二号で、第一班二〇〇人が、翌日第二班一五〇人が出発する予定である。

旅程
第一日目
東能代―上野―東京　車中泊
第二日目
―大阪―姫路―太子―岡山
岡山泊
第三日目
岡山―今野―高松―屋島―琴平　琴平泊
第四日目
琴平―高松―神戸―法隆寺―奈良　奈良泊
第五日目
奈良―清水寺―二条城―金閣寺―東本願寺―京都　京都泊
第六日目
京都―東京―上野（都内自由行動）　車中泊
第七日目
―東能代　解散

第一班　A組　C組　D組　G組
引率　田口先生　加賀先生
深川先生　藤原先生
第二班　B組　E組　F組
引率　野中先生　武田先生
中田先生
全般の指導
学校長　主任佐藤先生
市川先生　松淵先生

論点

▼今地球の環境問題が盛んに論議されているが、これは、全地球の生命にかかわる重大な問題であることは、言うまでもない事実である。我々の日常生活には、それほど切迫した事態がないように感じられる。▼しかし、一歩目を外に向けてみると、まず気候の異変に気がつかれるだろう。ここ二、三年、世界各地で大洪水や、かんばつが起っている。また、北極地方の寒冷化の広がりにより、北極近辺に住む人々にとっては、生死にかかわる問題になってきている。身近な所では、北海道の冷害がある。▼この気候の寒冷化は、地球の氷河周期と多少関係しているが、最大の原因は、工業の発展と、増え過ぎた車、そしてジェット機などによる大気汚染によるものである。この排気ガスなどの微粒子は、大気圏内に、半永久的に漂よっているのである。これは、地球をおおう幕になって、太陽光線をさえぎり極地方には寒冷化をもたらし、赤道地帯には、熱代謝が鈍り、蒸されるような状態を作り、猛暑と、集中豪雨とかんばつを招くのである。▼公害は、単に極地的に害をおよぼすだけでなく、地球の環境を左右し、生命の滅亡という危機をもたらしている。地球の自然は人類を包んでいる環境であり、人類は大自然の一部である。その自然を破壊したら？▼人口と食料の問題も、今後危機に瀕する重大問題である。これは、多産と医学の進歩と関連し、人口は増加の一途をたどっている。この人口増加にともなう食料が問題である。これは限られた地球内での量産であるから、食料難は免れられない現実（問題）である。

▼このような難題をかかえた人類がやらなければならない最大の課題は、自然保護である。我々学生は、この人類の危機をどのように考え対処していったらよいのであろうか。